

Let's Know Hiroshima Castle.

# しろや！ 広島城



No.63



広島城下絵屏風より「猿猴橋東詰 下馬門付近」(左) 「八丁馬場 京口御門付近」(右)

## これ、なんでしょう？ —たぶん、あれですよ—

### これ、なんでしょう？

江戸時代後期の広島城下町を描いた「広島城下絵屏風」(広島城蔵)。いろいろなものが描き込まれています。いまだ何なのか分からないものがちょこちょこ見受けられ、検討を続けています。今回は、しばらく何か分らなかったもののうち、「あ、これ、たぶんあれだったんだ！」とひらめいたものがありましたので、御紹介したいと思います。

「あれ」は、一つは猿猴橋の近く、東照宮へ向かう参道に設けられた下馬門の近くにあります。「いろは松」と呼ばれる、松並木の入り口です。もう一つは、京口御門から城内に向かい、四角や三角の狭間がある藪塀しとみべいの横を通して、突き当たりに折れ曲がった塀のところにあります。「猿猴橋近くのこれは参道沿いだから、何かがお祀りまつされている小さな祠ほこらなのかなあ？」とか、京口御門のところのものに至っては、「城内の武家屋敷にもごみ捨て場があったん

だろうなあ」と、勝手に判断していました。今年度、猿猴橋のものについて「これは何でしょうか？」とのお問い合わせをいただき、少し調べてみたところ、どうやらこれは、広島城下町に設置されていた、いわゆる「目安箱」の一つらしいということが分かってきました。

### 目安箱とは

目安箱と言えば、享保6年(1721)に行われた8代将軍徳川吉宗の「享保の改革」の施策の一つとして挙げられることでしょうか。「目安」とは、訴状のことで、現在の東京都千代田区丸の内にあった評定所前に訴状を入れる箱が置かれ、決められた日に箱の中の訴状に将軍自らが目を通しました。

実は、目安箱は幕府だけの施策ではなく、多くの大名たちも取り入れていた制度でした。広島藩でも、幕府に先立って、目安箱が置かれています。隣の福山藩にも寛保2年(1742)に置かれています。

広島藩の最初の目安箱は、正保2年(1645)に浅野家2代藩主光晟が各郡に置いて、特に役人の怠慢などを内訴させたと言われますが、間もなく廃止になっています。また、正徳2年(1712)、浅野家5代藩主吉長が、町方及び郡中14カ所に目安箱を設けたと記されています。「吉長公御代記」巻八上には、目安箱設置についての書付が見えます。また、城下には、享保8年(1724)12月15日に設置されました。江戸で将軍吉宗の目安箱が設置された2年後のことです。その管理は大目付・目付があたり、集められた書状は藩主が直轄しました。なお、郡中の目安箱は延享元年(1744)5カ所に減らされ、宝暦3年(1753)には三次のみとなりました。更に同6年(1756)にはこれも撤去されたため、残ったのは広島城下のもののみとなりました。

### 広島城下の目安箱はどこに？

広島城下の目安箱は、どこに置かれていたのでしょうか。「吉長公御代記」巻二十上には「下馬門、八丁馬場、中島本町」、『広島市史』巻二では、「京口御門内と、猿猴橋東北詰と、中島本町材木町入口との三所」と記されています。うち2カ所は、まさに「広島城下絵屏風」に描かれている場所と一致します。ただ、「広島城下絵屏風」を見ても、城下の繁華街だった中島本町には、それらしいものは見えません。西国街道が東西に貫通する付近は見られるのですが、もっと南の材木町の入口までは、描かれていないのです。別の絵図で材木町の入口を確認してみると、西国街道の一本南の道と材木町筋が交わるあたり(○付近)になります。いずれの場所も、たくさんの人が通る所に近い場所と言えるでしょう。



中島本町の目安箱が設置された材木町入口付近  
「広島城下町絵図」より

### 目安箱とその置き場所の様子は？

さて、目安箱はどんな形をしていたのでしょうか？江戸時代の目安箱として実物が残っているのは、現在の岐阜県恵那市にあった岩村藩のものがあります。これは、縁を金属で補強した鍵がかけられる木箱で、大きく「目安箱」の墨書があります。また、目安箱と言えば、江戸時代のイメージが強いかも知れませんが、明治元年(1868)には、新政府も京都や東京に目安箱を設置していました。京都三条橋側のものは、屋根付きの目安箱だったようで、その横に太政官の高札が立てられていました。また、現在の千代田区内幸町にあった東京府庁表門前に置かれたものは、高札の前に目安箱を置く台が作られていました。箱はいずれも鍵がかけられ、書状を差し入れる口のある頑丈な木箱のようです。

「広島城下絵屏風」に描かれた、目安箱が設置されたと思われる場所は、詳細までは分かりませんが、板屋根に腰壁のついた小屋風になっています。残念ながら、中に置かれているであろう目安箱は見えません。恐らく他所と同じような鍵付きの頑丈な木箱が置かれていたのではないのでしょうか。



京口御門内(左)と猿猴橋東北詰(右)の目安箱設置場所

### 目安箱の終焉

明治6年(1873)6月10日、太政官布告により、府県で設置していた目安箱は廃止、以後は申立は集議院(明治初期の政府の諮問機関)、並びに各地方庁へ差し出すこととなりました。『広島市史』には、城下にあった3カ所の目安箱も、明治5、6年まで存置していたと記されているので、この布告が出されるまでその役目を果たしていたのだと思われます。なお、「明治5年(1872)4月、京口門内の目安箱を県庁(この時三の丸にありました)門外南寄に移す」との記述が、『新修広島市史』年表にあります。

(前野 やよい)

# 広島藩の名湯 — 湯ノ山明神旧湯治場 —

山あいの自然豊かな町、広島市佐伯区湯来町にある湯ノ山明神旧湯治場は、かつて広島藩の湯治場として栄えた温泉です。旧来の湯坪や湯ノ山明神社は、当時の様相を伝えており、その付近は、神聖さを感じさせる清々しい空気に包まれています。旧来の湯坪の下段には「広島市湯の山温泉館」があり、冷たい源泉が流れ落ちる打たせ湯が、今も多くの人に親しまれています。

湯の山温泉の歴史は古く、およそ 1200 年前に花



旧来の湯坪

崗岩の深い割れ目から湧出したと伝えられています。古くから靈験の湯として知られ、江戸時代、寛延2年(1749)には、浅野家5代藩主吉長

の命で藩儒の堀正脩が湯の山温泉を訪れ、『靈泉記』を著しています。その後、藩主吉長も湯の山温泉を訪れて参詣・入湯しました。寛延年間(1748～1750)に和田村役人によって記された『湯の山温泉靈験記』には、足腰の立たなかった人や目の見えない人が温泉に入り、その靈験によって回復したという数々のエピソードが記録されています。こうした評判は広く安芸国内外に知れ渡り、多くの人が湯治に訪れていました。

寛永2年(1625)に郡代官に報告された文書には5月26日から6月24日までの入湯者は1,546名、そのうち他国288名、領分内1,258名と記されており、当時の繁栄ぶりを垣間見ることができます。

右上の図は、7代藩主重辰に仕え、広島藩の絵師としても活躍した、岡岷山という人物が著した『都志見往来日記・同諸勝図』に描かれた湯の山温泉です。これは、岡岷山が、寛政9年(1797)に広島城下から湯来、加計などを経て北広島町都志見の駒ヶ瀧を訪れ、城下に戻った7泊8日の旅の記録と道中の風景画を2冊にまとめたものです。これらは、藩主重辰に献上されていることから、当時の様子や風景をできるだけ正確に記録したと考えられ、歴史的にも貴重な資料とされています。

駒ヶ瀧は、古くから修行や景勝の地として知られ



『都志見往来日記・同諸勝図』みのち水内  
広島市立中央図書館(浅野文庫)所蔵

た所で、旅の目的地でもありました。岡岷山は、瀧への道が遠回りになるにも関わらず、水内(湯の山温泉)に立ち寄り、ここで1泊2日を過ごしました。

この旅行記の中で、初めて湯に入った時のことを「…手をさして試みるに温なる事人肌のごとし、則ち衣を脱ぎて湯壺に入る、初めて肌を浸す時冷気を覚ゆれ…」と記しており、「試しに湯に手を入れると湯温は人肌程度に感じ、着物を脱いで湯に入っていると冷たく感じた」という感想を持ったようです。

湯ノ山明神旧湯治場付近一帯は、昭和33年(1958)8月1日に広島県史跡「湯ノ山旧湯治場」に、昭和49年(1974)2月18日に国指定重要有形民俗文化財「湯ノ山明神旧湯治場」に指定されています。現在の「広島市湯の山温泉館」の内風呂には、適温に温められた温泉が満たされており、湯気のたち上る温泉に浸ることができます。また、今も変わらず身体によいと、多くの人が遠方からも訪れています。この歴史ある名湯が、これからも末永く受け継がれ、続いていってほしいものです。

(正連山 恵)



現在の湯の山温泉



広島市湯の山温泉館  
(広島市佐伯区湯来町471)

